

## 出雲方言の位置―日本語地図を利用して―

白石 智子

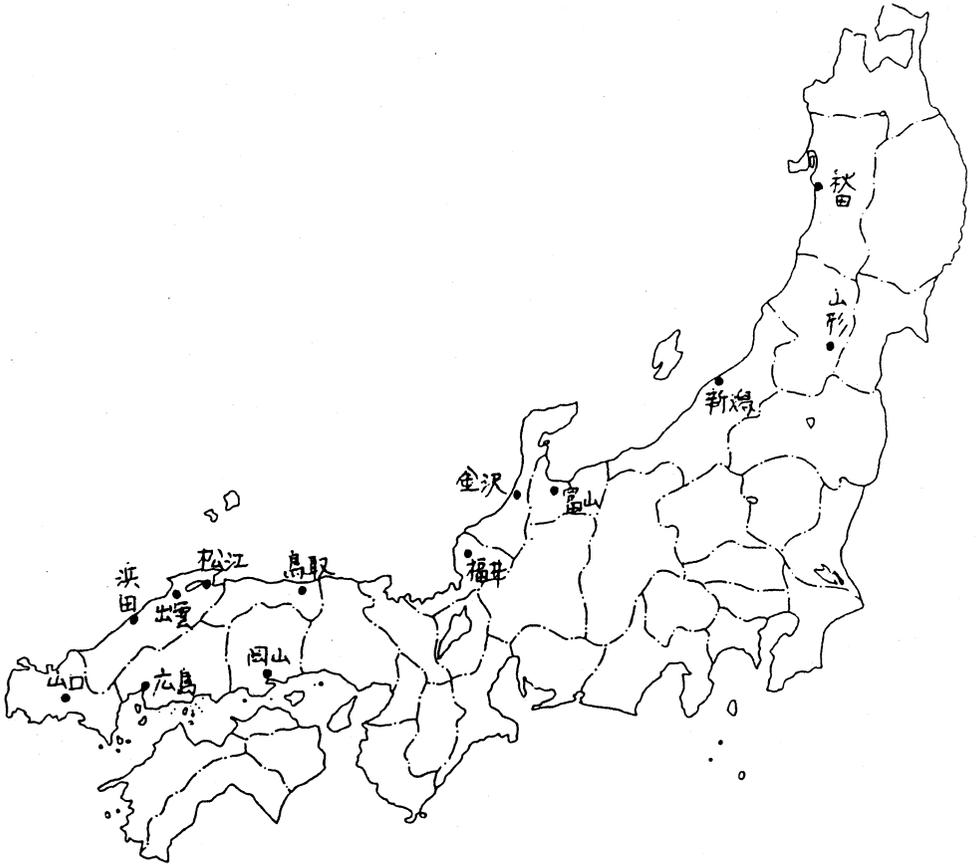
一 はじめに

筆者は、二年生の時ある講義のなかで、松本清張の『砂の器』という小説の話聞いた。先生のお話では、小説のなかの犯人はズーゾー弁を使っていたということから、警察ではそれだけを頼りに東北地方を捜査していたのだが、実は、全く反対方向の島根県の出雲地方にも東北地方と同じズーゾー弁を使うところがあり、犯人はその出身であったということであった。筆者は、この事に非常に興味を覚え、早速その本を購入し読んでみた。すると、小説自体もとても面白く、長編であるにもかかわらず数日で読み上げることが出来たのであるが、筆者はそれ以上に、何故、東北地方と出雲地方という遠く離れた二つの場所で、同じような発音が行われるのかということのほうが気になった。それで、何か機会があれば調べてみたいと思っていたのであるが、この度卒業論文を執筆するにあたり、是非この島根県出雲地方の方言について、他地点との比較も交えて少

しばかり研究してみたいと考えた。

本稿で対象とする地点は以下のようである。まず本稿の中心である出雲市、そして同じ島根県から浜田市と県庁所在地の松江市を取り上げる。島根県が属する中国地方からは県庁所在地の山口市（山口県）、広島市（広島県）、岡山市（岡山県）、鳥取市（鳥取県）。それから日本海側を北上し、北陸地方から福井市（福井県）、金沢市（石川県）、富山市（富山県）、新潟市（新潟県）、東北地方から山形市（山形県）、秋田市（秋田県）を取り入れた。また、島根県で浜田市を取り上げた理由は、浜田市が含まれる石見地方では石見方言が行われ山陽色が強いとされることからそれを検証するために取り上げた。日本海側を北陸から東北まで取り上げたのは、日本海沿岸一帯がもともとかなり似た言語状態にあったのではないかと考えがあるためである。

またこれらの地点の言語情報は、日本語地図から選定した。



## 二 方法

出雲方言と中国地方、北陸地方、東北地方で行われる方言とのかかわり合いを調べるために、前節にあげた一三地点を選んだ。そしてその地点各々で、ある言葉に対してどういふ言い方をするかを日本語地図から抜き出し、お互いに比較し、その相違点を点数化する（点数化の方法は後述）。それを言語地図各項目にわたって行い、統計すると、ある地点から見たときの他の地点との相対的な言語的距離が点数化される。これを一三地点全てに対して行くと、相互の言語的な距離が見えてくる。つまり、相対的な関係の度合いが相違度の合計点の比較でわかるのである。

今回は、日本語地図から語彙のみ一二五項目を採った。語彙のみを採った理由は、語彙というものは文化（言語文化）を最も直接に反映するものと考えられるからである。

具体的な点数化の方法を次に示す。異なり度合いを一〇点満点から〇点までの間で次のように設定する。

〇点 同じ形の場合

二点 語尾のみ異なるもの

四点 同系統と思われるものの最低

同系統の語が複数ある場合の最低

六点 同系統と異系統の語が同時にある場合の最低

八点 異系統の語が二つあり、そのうち一つの語尾のみ共通の場合

一〇点 全く異なる語形の場合

以上、この六つを基本にしてあとは相違度の程度に応じて点数化する。

### 三 点数化による結果及び分析

以上のような方法で各地点間相互の相違度を点数化し合計すると後に示す表3のようになる。同じ枠内で上方に示している数字は各地点の点数を満点の一二五〇点で割ったものである。また、地図によりこれら各地点の直線距離を調べて表にしたものが、後に示す表4である。

本稿では単回帰分析の手法を取り入れて分析を行った。

今回は変数に距離のみをとり計算を行った。表3（相違度）、表4（距離）の全データ（七八件）をもとに計算を行うと次の式が得られる。

$$Y = 32.1953 + 0.0278X \quad (\text{相関係数 } 0.765)$$

Yは予測値（単回帰分析から得られるある地点の予想される相違度）

これでは相関係数が低いので、筆者は相関係数を信頼の

置ける値に引き上げるため、いろいろなパターンを考慮して計算をやり直してみた。しかし、全く言語状態が違うと考  
えられる中国地方を除いた日本海側の地点だけにしたたり、  
距離が離れすぎている山形・秋田、京都文化の影響が強い  
と考えられる福井・金沢を除いて計算してみても、一向に相  
関係数は上がらず、逆に下がってしまう場合もあった。そこ  
で、島根県から採った三地点のうち山陽色が強い石見方言  
が行われるという浜田市を除いてみてはどうかと思ひ、上  
述したものと組み合わせ、日本海側の地点から、福井・金  
沢・浜田を除いて計算を行ってみた。

$$Y = 33.7848 + 0.0293X \quad (\text{相関係数 } 0.820) \quad \text{式 A}$$

すると、相関係数がかなり高くなり、十分信頼するに足  
ると思われる。よってこの式 A を採用することにす。デ  
ータをカットした部分はこの式 A によって計算を行い、新  
たに予測値・誤差を算出する。

他のパターンで計算したもののうち相関係数が八割を越  
えたものはその回帰グラフを後に示す。

次に、グラフの横軸に距離、縦軸に相速度をとって、表  
3・表 4 から得られるデータを書き込み、さらに上で得ら  
れた式 A を同じグラフに書き込むと図 A 〳 図 M が得られる。  
(図 A 〳 図 M は後に示す。図中の ○ は雲伯方言区、[ は  
中国地方、[ は北陸地方、] は東北地方をそれぞれ示す。)

表 3 二地点間の相速度の点数化及びその百分率

	山口	松江	出雲	浜田	広島	岡山	鳥取	福井	金沢	新潟	山形	秋田	富山
山口	44.2 553	41.0 513	28.6 357	31.4 393	38.3 479	39.3 491	43.7 546	45.3 566	45.1 564	55.7 696	62.4 780	48.6 608	
松江	44.2 553	23.4 293	37.7 471	47.6 595	42.1 527	40.4 505	50.8 635	48.4 605	50.0 625	55.1 689	60.2 753	48.9 611	
出雲	41.0 513	23.4 293	32.5 406	44.2 552	35.0 437	33.9 424	45.4 567	44.8 560	45.4 567	51.9 649	57.4 717	44.1 551	
浜田	28.6 357	37.7 471	32.5 406	30.7 384	28.1 351	27.3 341	37.4 467	39.1 489	37.7 471	50.9 636	52.6 657	39.6 495	
広島	31.4 393	47.6 595	44.2 552	30.7 384	33.5 419	38.0 475	43.4 542	44.5 556	45.6 570	56.2 703	62.6 783	47.8 598	
岡山	38.3 479	42.1 527	35.0 437	28.1 351	33.5 419	26.6 333	37.4 467	37.9 474	38.1 476	51.4 642	53.0 662	35.8 448	
鳥取	39.3 491	40.4 505	33.9 424	27.3 341	38.0 475	26.6 333	40.2 503	37.7 471	42.8 535	53.0 662	56.2 702	38.5 481	
福井	43.7 546	50.8 635	45.4 567	37.4 467	43.4 542	40.2 503	26.0 325	37.7 471	26.0 325	38.7 484	53.6 670	27.0 337	
金沢	45.3 566	48.4 605	44.8 560	39.1 489	44.5 556	37.9 474	37.7 471	26.0 325	37.0 463	37.0 463	55.3 691	25.9 324	
新潟	45.1 564	50.0 625	45.4 567	37.7 471	45.6 570	38.1 476	42.8 535	38.7 484	37.0 463	37.7 471	49.6 620	38.2 477	
山形	55.7 696	55.1 689	51.9 649	50.9 636	56.2 703	51.4 642	53.0 662	53.6 670	55.3 691	37.7 471	41.0 513	52.4 655	
秋田	62.4 780	60.2 753	57.4 717	52.6 657	62.6 783	53.0 662	56.2 702	57.9 724	55.4 692	49.6 620	41.0 513	53.7 671	
富山	48.6 608	48.9 611	44.1 551	39.6 495	47.8 598	35.8 448	38.5 481	27.0 337	25.9 324	38.2 477	52.4 655	53.7 671	

表4 二地点間の距離

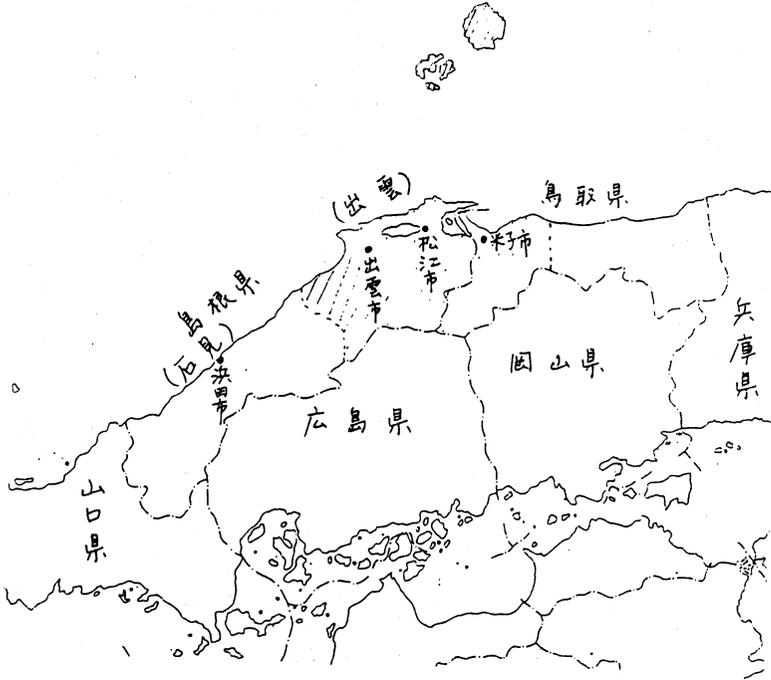
	山口	松江	出雲	浜田	広島	岡山	鳥取	福井	金沢	新潟	山形	秋田	富山
山口		210	182	102	99	239	299	489	548	810	926	992	600
松江	210		30	117	131	120	107	296	348	606	723	783	399
出雲	182	30		81	110	132	135	326	378	636	752	812	431
浜田	102	117	81		65	173	209	401	456	716	831	893	401
広島	99	131	110	65		140	204	392	452	714	830	902	504
岡山	239	120	132	173	140		96	261	326	588	702	786	374
鳥取	299	107	135	209	204	96		192	249	512	627	701	300
福井	489	296	326	401	392	261	192		68	327	440	531	113
金沢	548	348	378	456	452	326	249	68		263	378	464	53
新潟	810	606	636	716	714	588	512	327	263		117	221	215
山形	926	723	752	831	830	702	627	440	378	117		164	327
秋田	992	783	812	893	902	786	701	531	464	221	164		422
富山	600	399	431	401	504	374	300	113	53	215	327	422	

## 選択した語彙

1. ふけ (雲脂) 2. かお (顔) 3. ほほ (頬)  
 4. あご (顎) — 全体 5. め (目) 6. まゆげ (眉毛)  
 7. ものもらい (麦粒腫) 8. はな (鼻) 9. みみ (耳)  
 10. くち (口) 11. くちびる (唇) 12. した (舌)  
 13. つば (唾) 14. よだれ (涎) 15. おやゆび (親指)  
 16. ひとさしゆび (人差し指) 17. なかゆび (中指)  
 18. くすりゆび (薬指) 19. こゆび (小指)  
 20. ゆび (指) の総合図 21. しもやけ (凍傷)  
 22. かかと (踵) 23. みずおち (鳩尾) 24. あか (垢)  
 25. ほくろ (黒子) — 大きいもの 26. おとこ (男)  
 27. おんな (女) 28. ひまじ (曾孫)  
 29. おじいさん (祖父) 30. たこ (胤)  
 31. たけうま (竹馬) 32. おてだま (お手玉)  
 33. おにごっこ (鬼ごっこ) 34. かくれんぼ (隠れん坊)  
 35. おかね (貨幣) 36. おつり (釣銭) 37. いと (糸)  
 38. もめんいと (木綿糸) 39. わた (綿)  
 40. まわた (真綿) 41. せんたく (洗濯)  
 42. せともの (陶磁器) 43. すりばち (掃鉢)  
 44. まないた (組板) 45. めびじ (米櫃)  
 46. こめ (米) 47. うるち (粳米) 48. もちこめ (糯米)  
 49. もみがら (粃殻) 50. むか (糠)

- 51. さつまいも (甘藷) 52. かぼちゃ (南瓜)
- 53. なす (茄子) 54. とうもろこし (玉蜀黍)
- 55. とうがらし (蕃椒) 56. た (水田) - 区画
- 57. た (水田) - 集合 58. あぜ (畦畔) 59. はたけ (畑)
- 60. かかし (案山子) 61. いえ (家屋)
- 62. ふすま (襖障子) 63. にわ (庭園) 64. いど (井戸)
- 65. はやし (林) 66. うま (馬) 67. うし (牛)
- 68. おうし (牡牛) 69. めうし (牝牛)
- 70. こうし (仔牛) 71. もうもう (牛の鳴き声)
- 72. もぐら (土竜、偃鼠) 73. ふくろう (梟)
- 74. せきれい (鶺鴒) 75. すずめ (雀) 76. とさか (鶏冠)
- 77. うろこ (鱗) 78. かえる (蛙) 79. とかげ (蜥蜴)
- 80. へび (蛇) 81. まむし (蝮) 82. かまきり (蟾蜍)
- 83. とんぼ (蜻蛉) 84. はえ (蠅) 85. くも (蜘蛛)
- 86. くものす (蜘蛛の巣) 87. なめくじ (蛞蝓)
- 88. どくだみ (葎菜) 89. きのこ (茸、蕈)
- 90. まつかさ (松毬) 91. たけ (竹) 92. とげ (裂片)
- 93. とげ (刺、棘) 94. たいよう (太陽) 95. つき (月)
- 96. あめ (雨) 97. つゆ (梅雨) 98. ゆうだち (夕立雨)
- 99. かみなり (雷) 100. にじ (虹) 101. ゆき (雪)
- 102. こおり (氷) 103. つちら (氷柱)
- 104. じしん (地震) 105. つむじかぜ (旋風)
- 106. けむり (煙) 107. ゆげ (蒸気) - 湯の場合
- 108. ゆげ (蒸気) - 飯の場合 109. におい (芳香)
- 110. はい (灰) 111. ほこり (埃)
- 112. ごみ (目に入るもの、塵) 113. おととい (一昨日)
- 114. おとといのばん (一昨晚) 115. きのう (昨日)
- 116. さくばん (昨晚) 117. きょう (今日)
- 118. こんばん (今晚) 119. あした (明日)
- 120. あしたのばん (明晩) 121. あさって (明後日)
- 122. しあさって (明後日) 123. なのか (七日)
- 124. ここのか (九日) 125. いくつ (何歳)

本文中での雲伯方言区



#### 四 考察

前節で得られた図A、図Mを見ると、式Aで表される直線より下に位置する都市と上に位置する都市とがあることが分かる。上に位置すればするほど距離の割には言語の相速度が大きく、下に位置すればするほど距離の割に言語の相速度が小さいことを表している。また直線に近いほど、言語が距離と見合った相速度を持っていることを示す。以下、これらの図に基づいて考察を進める。

##### 図A、山口市から見た場合

全体的に見てほとんどの対象地点が直線より下に位置している。これは、選択した諸地点において言語的に非常に開放的な都市であると言ふことができよう。直線より上に位置するのは松江市（誤差 $\pm 3.0\%$ ）直線から $4.3\%$ 上方に位置するということを表す。以下同様）と出雲市（誤差 $-1.9\%$ ）だけであり、距離の割には言語的な異なりが大きいことを示す。

松江市と出雲市はともに雲伯方言区に入り、同じ中国地方でもかなり特殊であるので、このような結果が出たのだろうと思う。しかし、同じ島根県でも浜田市（誤差 $-1.8\%$ ）は直線よりかなり下に位置しており、このことは先述した

ように言語的に非常に近いことを示していて、かなり交流があったものと考えられる。

その他の対象地点は、広島市（誤差 $-5.3\%$ ）、岡山市（誤差 $-2.5\%$ ）、鳥取市（誤差 $-3.2\%$ ）、福井市（誤差 $-4.4\%$ ）、金沢市（誤差 $-4.5\%$ ）、新潟市（誤差 $-1.2.4\%$ ）、山形市（誤差 $-1.5.2\%$ ）、秋田市（誤差 $-0.4\%$ ）、富山市（誤差 $-2.8\%$ ）と、いずれも直線より下に位置している。

ここで、他の対象地点がほぼ直線に沿っているのに対し、距離の離れている新潟が距離よりかなり下方に位置していることは特筆すべきである。

##### 図B、松江市から見た場合

全体的に見て、ほとんどの対象地点が直線より上に位置している。つまり、言語的に非常に孤立していると言ふことができよう。

直線より下に位置しているのは出雲市（誤差 $-1.1.3\%$ ）と新潟市（誤差 $-1.1.5\%$ ）の二地点。

直線より上に位置しているのは、山口市（誤差 $4.3\%$ ）、浜田市（誤差 $0.5\%$ ）、広島市（誤差 $10.0\%$ ）、岡山市（誤差 $4.8\%$ ）、秋田市（誤差 $3.5\%$ ）、富山市（誤差 $3.4\%$ ）の九地点。山形市（誤差 $0.1\%$ ）は距離に見合った位置にあると言えるだろう。

中国地方で山陽地方の三県が相連度の大きいことは予想していた通りであったが、同じ日本海側で隣県の鳥取も直線より上に位置したことは意外であった。この事から、鳥取市は兵庫県に隣接しておりそちらの影響が強いのではないかと考えられる。

また同じ北陸地方で、新潟市だけが直線より下で、他の福井市・金沢市・富山市が直線より上なのはその文化からも分かるように、京都文化の影響が強いためと思われる。

#### 図C、出雲市から見た場合

直線より上に位置しているのは山口市（誤差1.9）、広島市（誤差7.2）、福井市（誤差2.1）の三地点。

直線より下に位置しているのは、松江市（誤差11.3）、浜田市（誤差3.7）、岡山市（誤差2.7）、鳥取市（誤差3.8）、新潟市（誤差7.0）、山形市（誤差3.9）、富山市（誤差2.3）の七地点。

金沢市（誤差0.1）、秋田市（誤差0.2）は距離に見合った位置にあると言えるであろう。

全体的に見て、同じ雲伯方言区の松江市とかなり異なった様相を示したことは驚きである。これまでは、出雲市のほうが特殊であるというのが定説であったが、この図から見ると松江市よりも出雲市のほうが解放的であるということにな

る。しかし、図を見ても分かるように出雲市と松江市自体は非常に近い言語状態にあると言える。

#### 図D、浜田市から見た場合

直線より上に位置しているのは松江市（誤差0.9）の一点であり、言語的に非常に開放的であるということが出来るであろう。

直線より下に位置している他の対象地点は、山口市（誤差8.2）、出雲市（誤差3.7）、広島市（誤差5.0）、岡山市（誤差10.8）、鳥取市（誤差12.6）、福井市（誤差8.1）、金沢市（誤差8.0）、新潟市（誤差17.2）、山形市（誤差7.2）、秋田市（誤差7.3）、富山市（誤差5.9）の十一地点で、どこを見ても直線からかなり下方に位置し、距離の割に言語的に近いということができよう。

ここで、山陽地方と近いことは予想のついたことであるが、鳥取市とかなり近い言語状態にあることは、同じ山陰地方で松江市と出雲市を飛び越えて交流のあったことを示しており、雲伯方言区が言語島として孤立していると言われていることを納得させる。

図E、広島市から見た場合

直線より上に位置しているのは、松江市（誤差 10.0）、出雲市（誤差 7.2）、秋田市（誤差 2.4）の三地点。

直線より下に位置しているのは、山口市（誤差 5.3）、浜田市（誤差 5.0）、岡山市（誤差 4.4）、鳥取市（誤差 1.8）、福井市（誤差 1.9）、金沢市（誤差 2.5）、新潟市（誤差 9.1）、山形市（誤差 1.9）、富山市（誤差 0.8）の九地点。

雲伯方言区の二地点が距離の割に言語的な異なりが大きいことは、予想していた通りであった。

他の地点は、新潟市を除いてほぼ直線に沿っているといえることが出来る。新潟市が直線よりかなり下方に位置していることは、図Aの場合と同様である。

図F、岡山市から見た場合

全体的に見てほとんどの対象地点が直線より下に位置しており、言語的に開放的であるといえることができる。直線より上に位置するのは、松江市（誤差 4.8）だけである。

その他の対象地点は、山口市（誤差 2.5）、出雲市（誤差 2.7）、浜田市（誤差 10.8）、広島市（誤差 4.4）、鳥取市（誤差 10.0）、福井市（誤差 4.0）、金沢市（誤差 5.4）、新潟市（誤差 12.9）、山形市（誤差 3.0）、

秋田市（誤差 9.8）、富山市（誤差 8.9）と、いずれも直線より下に位置している。

ここでは分布の仕方が変わっており、山口・広島といった同じ山陽地方よりも、山陰地方の鳥取・浜田、北陸地方の福井・金沢・富山・新潟などが下方に位置している。

間に中国山地があるにもかかわらず、鳥取市とこれだけ近い言語状態にあるということは、互いに隣接する兵庫県からの影響であろうか。

また、新潟市が非常に下のほうに位置するのは、他の山陽地方の場合と同様である。

図G、鳥取市から見た場合

直線より上に位置しているのは四地点、松江市（誤差 3.5）、福井市（誤差 0.8）、山形市（誤差 0.8）、秋田市（誤差 1.9）。直線より下に位置しているのは、八地点、山口市（誤差 9.2）、出雲市（誤差 8.8）、浜田市（誤差 12.6）、広島市（誤差 1.8）、岡山市（誤差 10.0）、金沢市（誤差 3.4）、新潟市（誤差 6.0）、富山市（誤差 4.1）。

岡山市から見た場合もそうであったが、雲伯方言区の二地点が直線をはさんで上下に大きく離れ、且つ距離が遠い

出雲市のほうが言語的に近いところに位置しているのがおもしろい。この図から見ると、松江市のほうが特殊であると言えることはもちろんのことであるが、互いを比較すると非常に近い二地点に何故これだけ大きな差が生じるのであろうか。

#### 図H、福井市から見た場合

全体的に見た場合、対象地点が直線より上か下かどちらか一方に偏っているとは感じられない。

直線より上に位置しているのは、松江市（誤差 8.3）、出雲市（誤差 2.1）、鳥取市（誤差 0.8）、山形市（誤差 6.9）、秋田市（誤差 8.6）の五地点。

直線より下に位置しているのは、山口市（誤差 7.7）、浜田市（誤差 8.1）、広島市（誤差 1.9）、岡山市（誤差 7.0）、金沢市（誤差 9.8）、新潟市（誤差 7.7）、富山市（誤差 10.1）の七地点。

この分布を見ると、直線より上に位置しているのはいずれも辺境で、福井は京都に隣接していることもあり、やはり京都文化の影響がかなり強いのではないかと考えられる。また、同じく京都文化の影響が強いと思われる金沢市・富山市も予想どおり非常に言語的に近いことを示している。

#### 図I、金沢市から見た場合

直線より上に位置しているのは三地点、松江市（誤差 7.7）、山形市（誤差 10.7）、秋田市（誤差 8.0）。直線より下に位置しているのは八地点、山口市（誤差 4.5）、浜田市（誤差 8.0）、広島市（誤差 2.5）、岡山市（誤差 5.7）、鳥取市（誤差 3.4）、福井市（誤差 9.8）、新潟市（誤差 4.5）、富山市（誤差 9.4）。出雲市（誤差 0.2）は、ほぼ直線上に位置している。

ここでも福井の場合と同様、京都文化の影響が考えられるが、図Hでは直線より上に位置していた出雲市・鳥取市がここでは直線より下に位置しているところを見ると、京都文化の影響はそれに隣接する福井市ほどではないということができようか。

#### 図J、新潟市から見た場合

全体的に見て、ほとんどの対象地点が直線より下に位置している。つまり、言語的に開放的であるというができる。

直線より上に位置するのは、山形市（誤差 0.5）、秋田市（誤差 9.8）の二地点のみ。

直線より下に位置するのは、山口市（誤差 12.4）、松江市（誤差 1.5）、出雲市（誤差 7.0）、浜田市（誤差

—17.1）、広島市（誤差—9.1）、岡山市（誤差—12.9）、鳥取市（誤差—6.0）、福井市（誤差—4.7）、金沢市（誤差—4.5）、富山市（誤差—1.9）の一〇地点。

同じ北陸地方の対象地点よりも、距離の離れた対象地点が言語的に近いことを示すなど、奇妙な分布をしている。新潟市は、ほとんどの対象地点と平均的に非常に近い言語状態であることを示しているが、このことは新潟市が地理的位置からも言語情報の発信地としては考えにくいことから、特徴的なことである。

#### 図K、山形市から見た場合

全体的に見た場合、近くの都市は直線より上に位置し、岡山市以遠の都市は松江市を除いて直線より下に位置するという、奇妙な分布を示している。

直線より上に位置しているのは、鳥取市（誤差—0.8）、福井市（誤差—6.9）、金沢市（誤差—10.4）、新潟市（誤差—0.5）、秋田市（誤差—2.4）、富山市（誤差—9.0）の六地点。

直線より下に位置しているのは、山口市（誤差—5.2）、出雲市（誤差—3.9）、浜田市（誤差—7.2）、広島市（誤差—1.9）、岡山市（誤差—3.0）の五地点。

松江市（誤差—0.2）は、距離に見合った位置にあると言

えるだろう。

同じ東北地方で、言語的に近いだろうと思われた秋田が、直線より上に位置しているのは驚きである。

また、直線より下に位置している都市のうち、他の四地点から見ても近いとは思えなかった出雲市が、同じような相違度で位置していることは特筆すべきことであろう。

#### 図L、秋田市から見た場合

全体的に見ると、山形市ほどはっきりしてはいないものの、やはり近くの都市のほうが直線より上に位置するという傾向にあり、その振れ方は山形市の場合よりも大きく、山形よりも言語的に孤立していると言える。

山形と比べると、全体的に相違度が上がった感じであるが、その中で浜田市と岡山市の相違度があまり変化していないのが不思議である。

直線より上に位置しているのは八地点、松江市（誤差—3.5）、広島市（誤差—2.4）、鳥取市（誤差—1.9）、福井市（誤差—8.6）、金沢市（誤差—8.0）、新潟市（誤差—9.3）、山形市（誤差—2.4）、富山市（誤差—7.6）。直線より下に位置しているのは三地点、山口市（誤差—0.4）、浜田市（誤差—7.3）、富山市（誤差—3.8）。出雲市（誤差—0.2）はほぼ距離に見合った位置にあると

言えよう。

図M、富山市から見た場合

直線より上に位置しているのは、松江市（誤差 3.7）、山形市（誤差 9.0）、秋田市（誤差 7.6）の三地点である。

その他の対象地点はすべて直線より下に位置しており、山口市（誤差 -2.8）、出雲市（誤差 -2.3）、浜田市（誤差 -5.9）、広島市（誤差 -0.8）、岡山市（誤差 -8.9）、鳥取市（誤差 -4.1）、福井市（誤差 -10.1）、金沢市（誤差 -9.7）、新潟市（誤差 -1.9）である。

ほとんどの対象地点が直線より下に位置しているなか、東北地方の二地点と松江市という辺境だけが直線より上に位置しており、金沢市の場合と同様、福井市ほどではないものかなりの京都文化の影響が見られる。

各回帰グラフのうち相関係数が8割を越えたもの

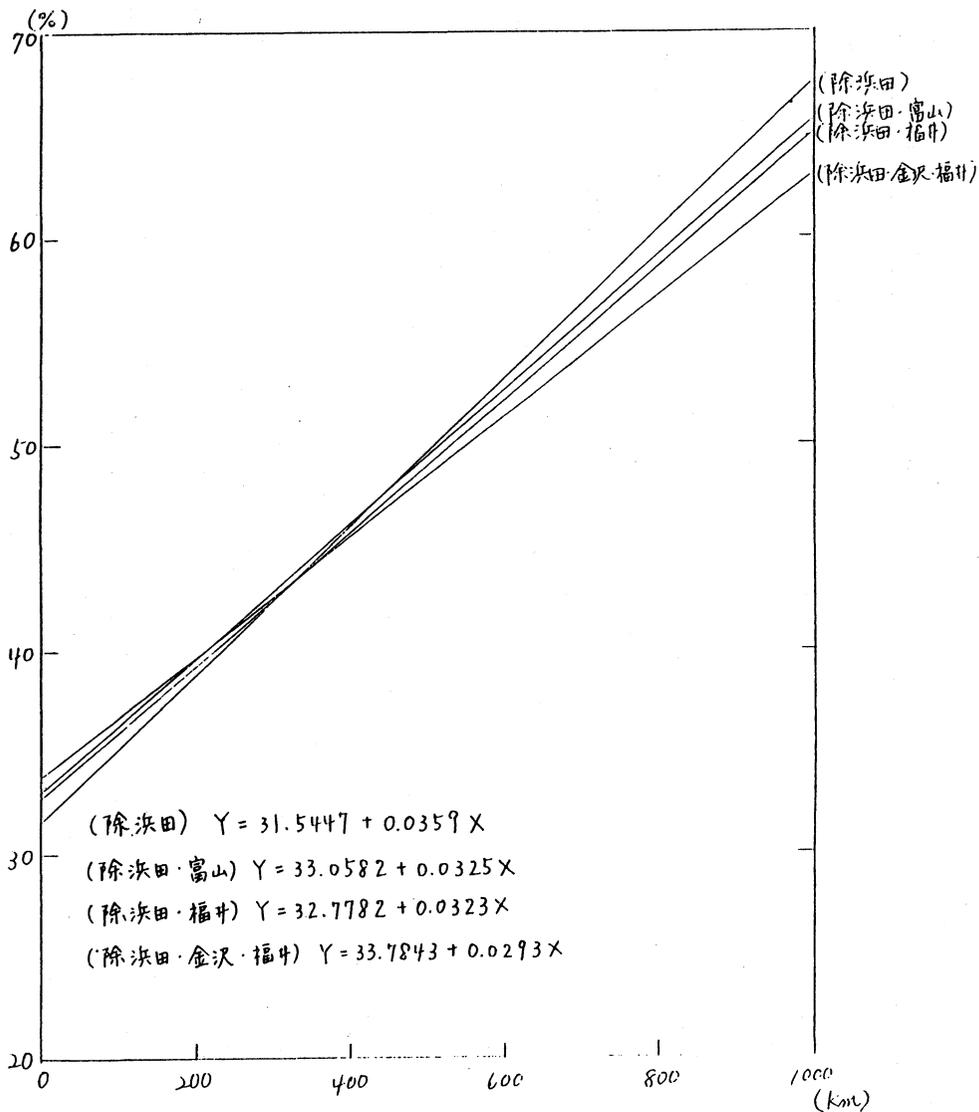


図 A

山口から見た場合

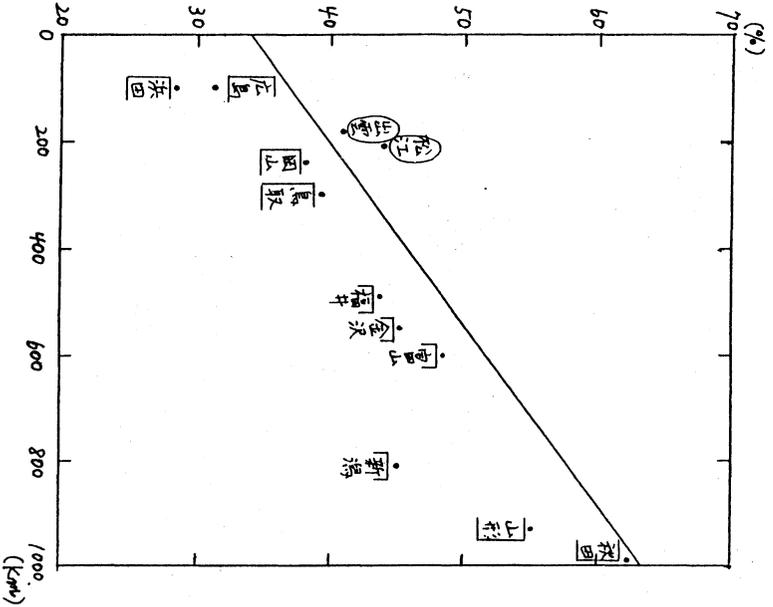


図 B

松江から見た場合

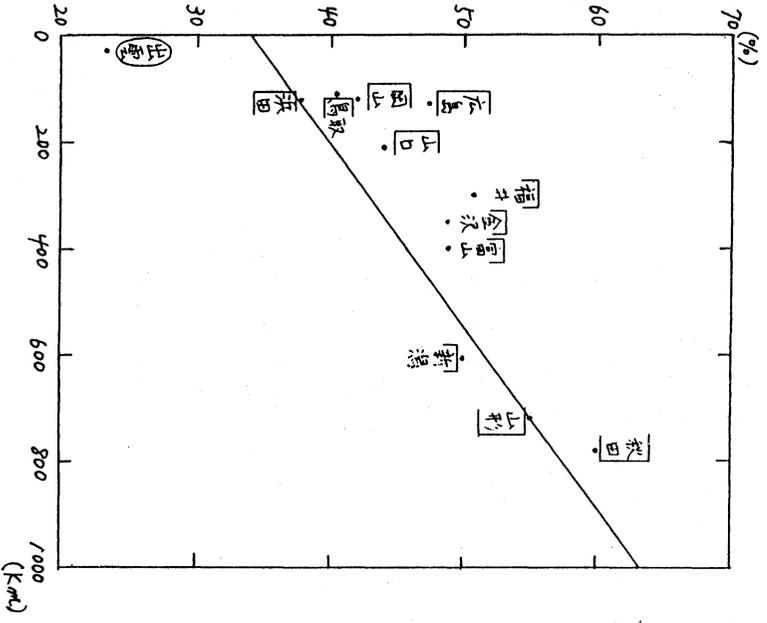


図 C

出雲から見た場合

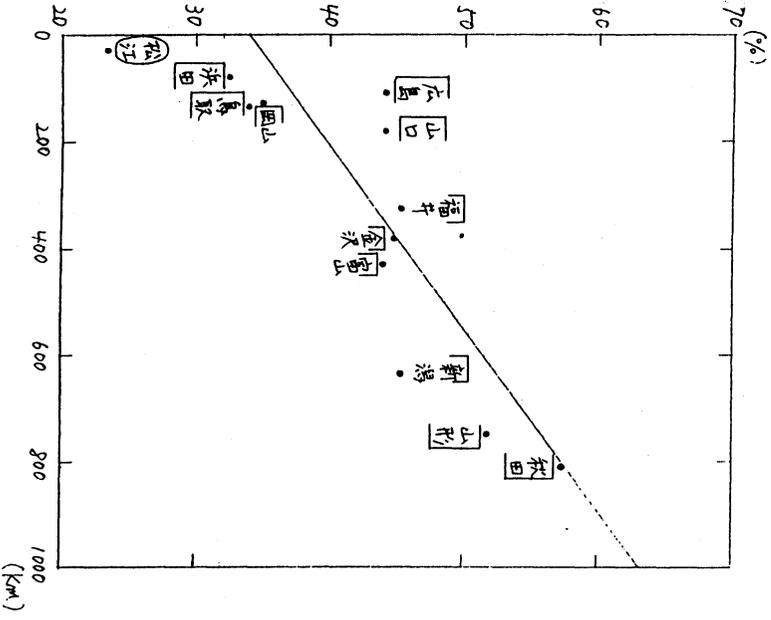
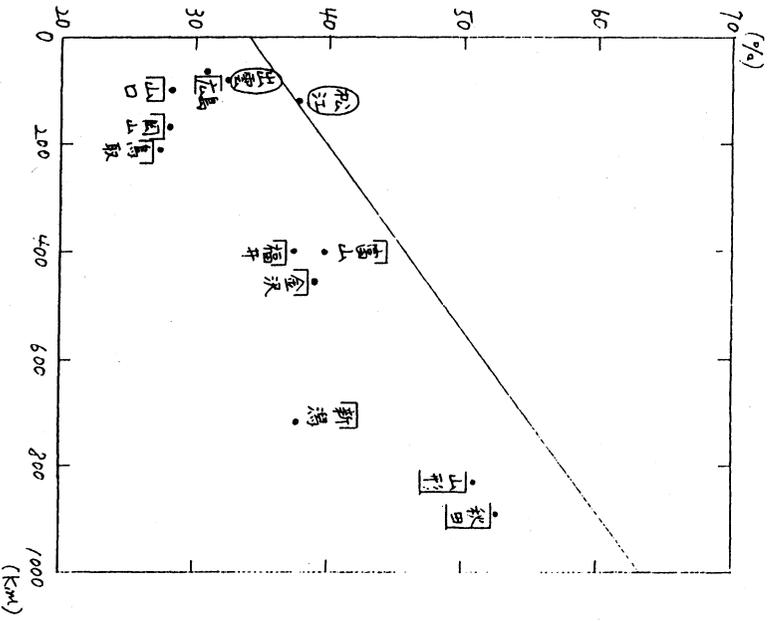
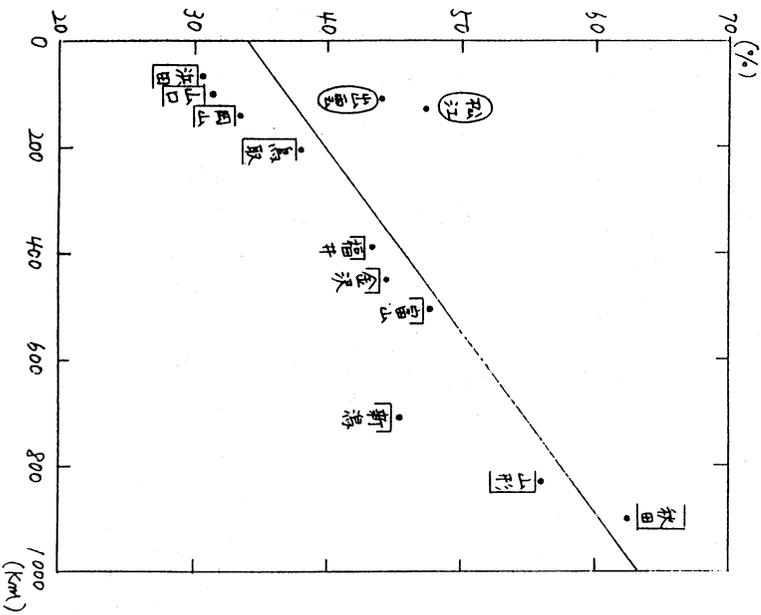


図 D

浜田から見た場合



図E  
広島から見た場合



図F  
岡山から見た場合

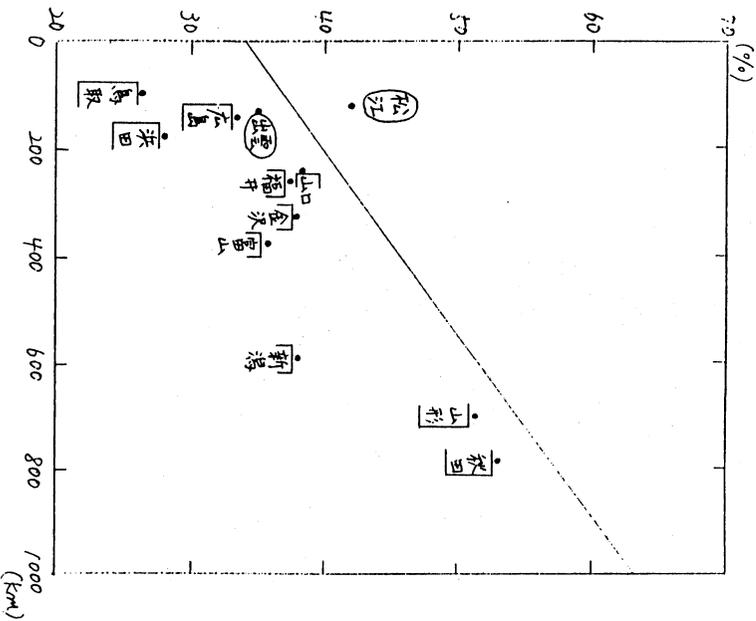


図 G

鳥取から見た場合

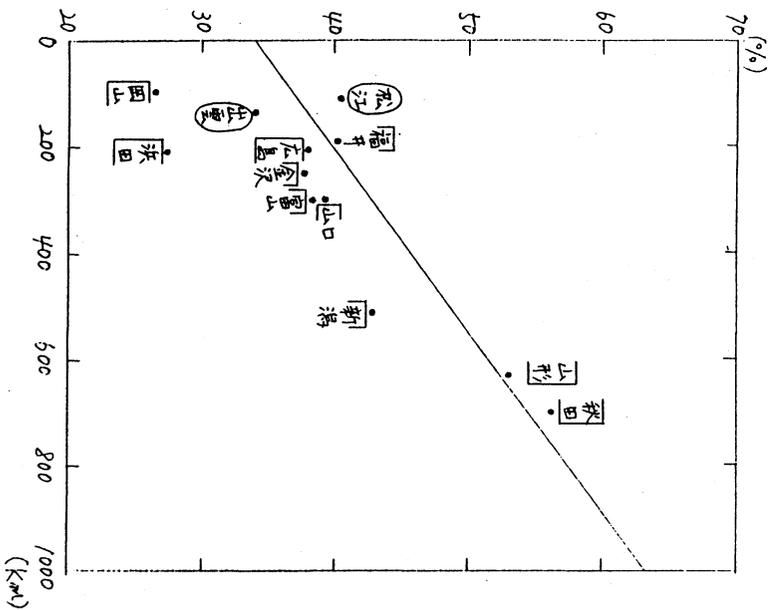


図 H

福井から見た場合

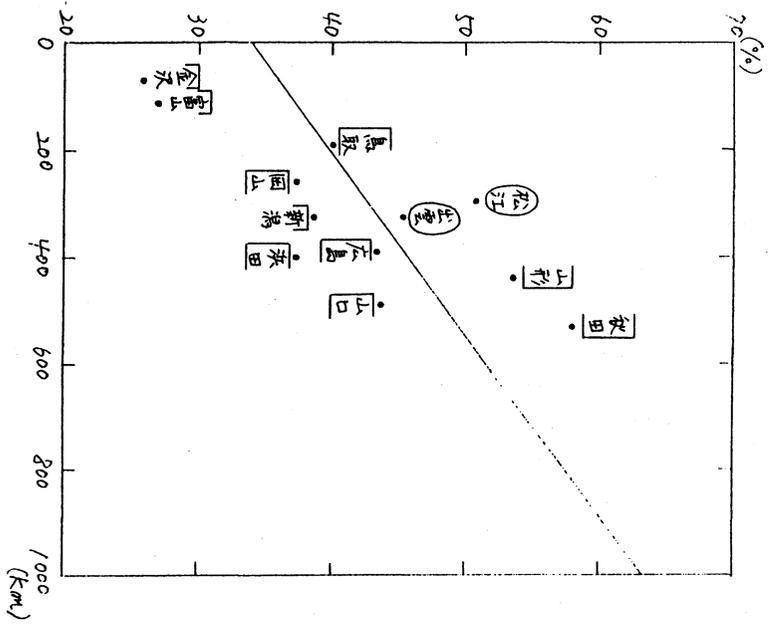


図 I  
金沢から見た場合

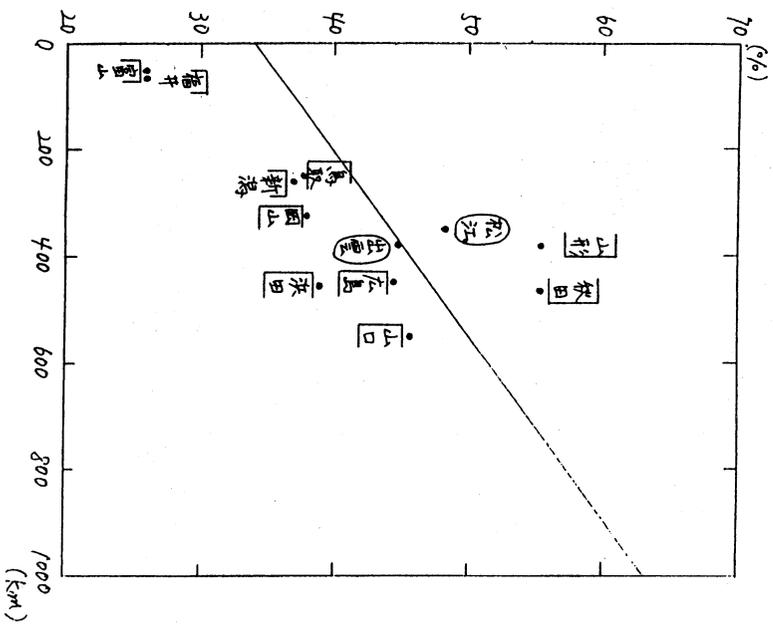
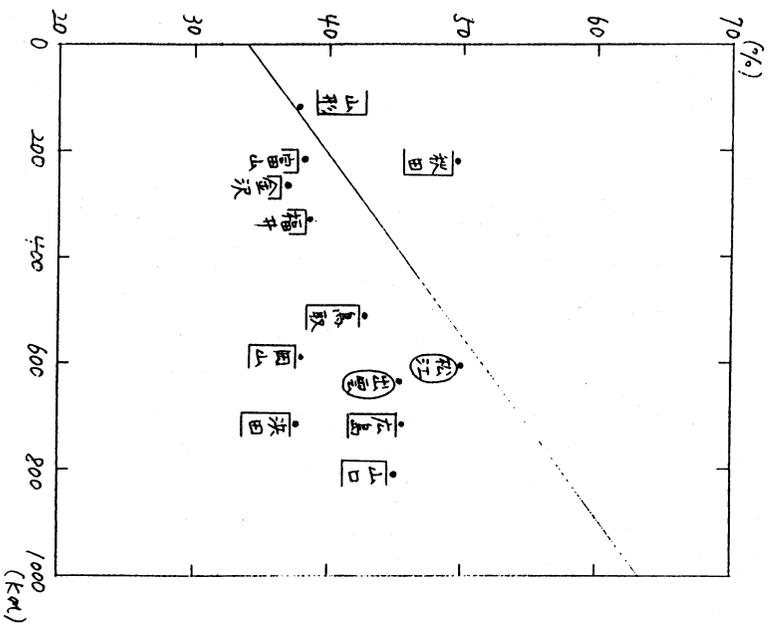
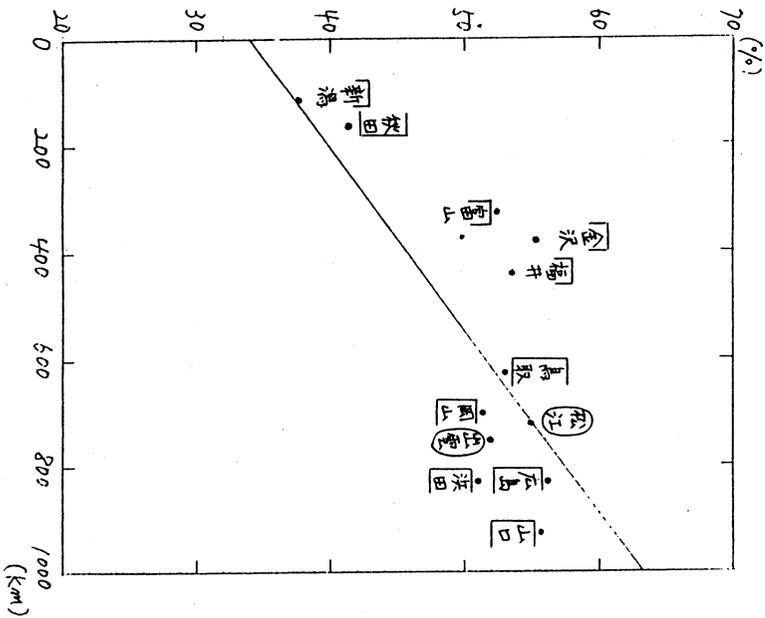


図 J  
新潟から見た場合



図K

山形から見た場合



図L

秋田から見た場合

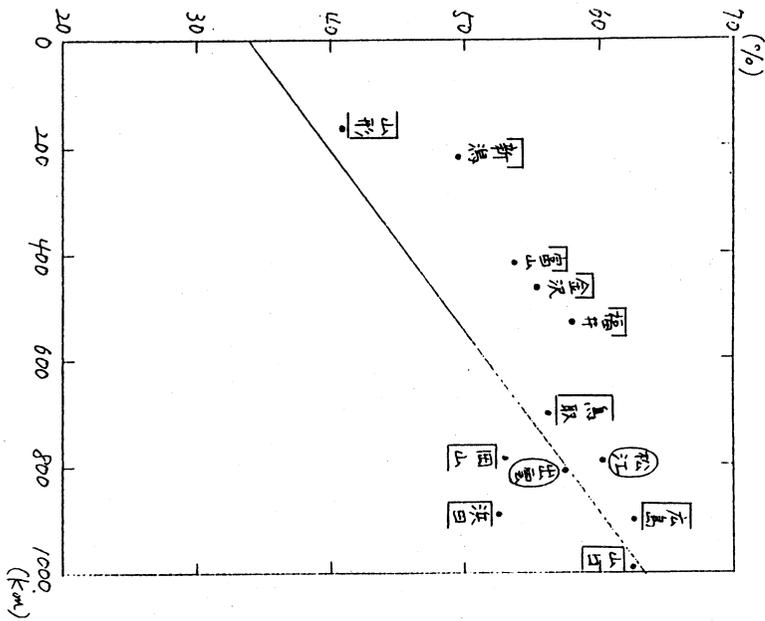
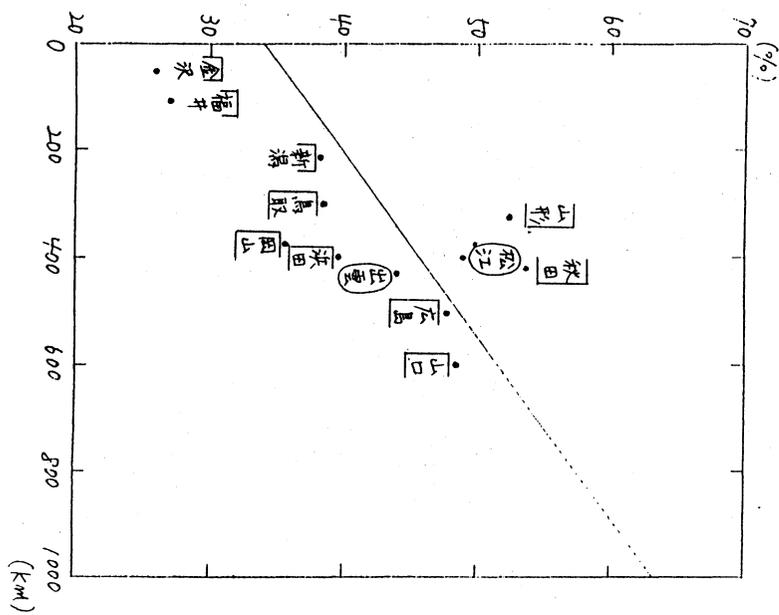


図11

富山から見た場合



結論

本稿では、研究者間で言われている「日本海沿岸一帯がもともとかなり似た言語状態にあったところに、京都の方言が進出してこれを中断した」という仮説を基に、一三都市を選定し検証してきたわけであるが、これから次のような事が言えるかと思う。

まず、島根県内部の事に関して述べると、同じ雲伯方言区に入る出雲と松江に各対象地点で開きが見られ、かつ松江のほうが出雲よりも閉鎖的であったことは、従来の研究齋で例として取り上げられるのは出雲ばかりで筆者自身出雲が閉鎖的であると考えていたことから、非常に驚きであった。しかし、全体的に見ると、やはり浜田を含む石見方言区と雲伯方言区の対立がはっきりしている。雲伯方言区が閉鎖的なのに比べ浜田は非常に開放的で、山陽色が濃いと言うことが出来る。

他の中国地方と出雲地方との関係について述べると、どの地点から見ても大きな差があり、親近性は感じられない。この事は、間に中国山地が横たわっていることからあまり交流がなかったと説明できる。隣県の鳥取との相違は、鳥取は岡山と言語的に近いと言えることから、共にその隣県である兵庫県との交流が密であったのではないかと考え

られる。

北陸地方と出雲地方との関係はどうであろうか。新潟以外の都市とはかなりの相違が見られる。これは、福井・金沢・富山といった地方はその文化からも分かるように、京都文化の影響を少なからず受けていることから、言語もその影響が強いと考えられる。特に福井は、研究書によって京都・滋賀と共に語られることがあるほどで、今回の検証でもそれが顕著である。新潟が、他の三つの対象地点に比べほとんどの対象地点から見ても言語的に近いことを示したのは、地理学上ではこの四つの都市は北陸地方とされるのであるが、方言学上では福井・金沢・富山を北陸方言、新潟を越後方言として区別し、この越後方言は東海道のほうと近いとされることから開放的であると説明できる。

東北地方と出雲地方の関係はどうか。予想していた程の親近性は無かったが、他の対象地点に比べると非常に距離が離れている割には言語的に近いということが出来るのではなからうか。特にこの両地方が閉鎖的であることを考えると、言語的に近いと思われる。

以上のことから、今回の検証ではまだ完全な形ではないが、多少は今まで言われていた仮説を証明することが出来たのではないかと思う。